

# 茨城、福島の海軍特攻基地 の調査報告

丹 賢一

2002年9月

## はじめに

### 1 海軍水上水中特攻隊

### 2 茨城・福島の震洋隊

#### ①第138震洋隊渡辺部隊

五型震洋艇図

#### ②第141震洋隊三溝部隊

### 3 福島の第12海竜隊宮崎部隊

「海竜」後期型一般配置図

## まとめ

# はじめに

今日まで茨城・福島には海軍特攻基地はなかったと考えられてきた。両自治体史や地元郷土史家の著述にも、それに関する記述は見あたらない。

ところが1997年6月、地元北茨城市の風船爆弾基地について調査中、同市平潟住民から終戦間際にベニヤ板製特攻ボート（以下特攻ボート）を見たとの複数証言を得た。さらに調査を続けると共に特攻関係文献研究を行ったところ、その特攻ボートの正体は震洋艇であることが判明した。1998年7月神田古書店街（東京）で、震洋会編文献<sup>1)</sup>を入取、その後の特攻ボート解明に決定的役割を果たすことになった。この文献は（イ）隊員自身による現地調査の記録である。（ロ）簡略ではあるが、全震洋部隊の記録と多数の基地写真を収録している。（ハ）隊員による震洋隊史の記録が記されているなど、震洋隊解明の決定版とも言うべき貴重な文献である。しかし終戦直前における部隊や基地進出と、その異動の実態について、未だ不明確なところが散見される。ところが、監修者荒井志朗氏、震洋会事務局長兼編集委員長（後同会々長）上田恵之助氏の助言と資料提供のご協力をいただき、その間隙をうめる調査を開始した。さっそく御紹介のあった、いざや会（元第138震洋隊）の元特攻ボート搭乗員生沢久氏（流山市）との面談が実現した。その証言を得て、同会誌<sup>2)</sup>のコピーが許された事で、地元海軍特攻隊調査は一歩進展した。そのコピーを精読すると、同会誌の「おもい出の記」の中の震洋隊と海竜隊の交流記録を知る。いわき市小名浜の特殊潜航艇海竜については、既に地元住民の証言を得ていたので、こちらの方も調査を進めることにした。その

後、前記震洋会長上田氏に送付いただいた海軍極秘・軍機密文書によって、震洋隊小名浜基地に海竜隊基地が存在したことに確信をもつに至った。同基地に配備された海竜艇は改良後期量産型で、魚雷2本と頭部に600キロ炸薬を搭載した特攻艇であった。人間魚雷回天以外にも、水中特攻艇があったのだ。間もなく元海竜隊の方々と交信が可能となり、茨城の第141震洋隊と福島第138震洋隊、同第12海竜隊の調査が大きく進展した。さらに、いざや会事務局長金子満雄氏（白河市）、幹事藤井清氏（白河市）のご協力で2001年11月、国民宿舎「勿来関荘」（いわき市）において、全国17名の元震洋隊員、平潟基地管掌元憲兵隊昭山光雄氏（日立市）、元伏竜隊員小林喜朗氏（北茨城市）の方々と地元市民との報告討論会が実現し、ここに幻の地元海軍水上水中特攻隊の実態が、市民の前に大きく浮上することになった。

## 1 海軍水上水中特攻隊

**水上特攻隊** 日本海軍における唯一の水上特攻隊は震洋隊である。日本海軍は1942年6月、ミッドウェー海戦において最初の大敗北を喫した。同8月には米軍の本格的反攻作戦が展開、ガダルカナル島上陸が開始され、約半年にわたる激烈な攻防戦に大敗し、日本軍は1943年2月、全部隊の撤収作戦に辛うじて成功した。この二度の大敗北以後、太平洋における作戦の主導権は連合軍に移った。大本営は1943年3月、大海指第209号発令、第三段作戦日本海軍作戦方針を連合艦隊司令長官に指示して、作戦方針を守勢に転換する。このような戦局下に、退勢打開の為の特殊兵器の開発実戦化に熱心な連合艦隊首席参謀黒島亀人大佐が軍令部

に「モーターボートに爆薬を装備して、敵艦に激突させる方法はないだろうか」と打診している。間もなく軍令部軍備担当第二部長に昇進した前記黒島少将は、特攻ボートによる特別攻撃計画推進に決定的役割を果たした。それは1944年4月、軍令部総長が海軍大臣に対し、仮称④金物を兵器の特殊緊急実験製造として要請したのが嚆矢である。同5月仮称④艇と、その呼称を変えて試作に成功、兵器として同8月採用されると、正式に震洋艇と命名された。捷一号作戦により同9月以降、小笠原諸島、比島、中国南岸、台湾へと進出、1945年以降、連合軍の本土上陸に対する水際作戦として、日本海軍の本土防衛主戦力になり、太平洋岸に進出した。1945年6月8日の御前会議における大本営陸軍部の戦果判断基礎資料によると、特攻ボートの攻撃成功率は10%であった。1945年8月終戦までに、全艇6,197隻製造、146部隊、114基地進出<sup>3)</sup>となっているが、同7月以後進出の部隊は、特攻ボートが間に合わなかったり、基地建設中であったのが実態である。また総戦死者約1,824名でその大部分は比島における戦闘死者約923名と沖縄戦の戦闘死者425名であり、他は部隊輸送中に連合軍の攻撃による海没戦死者で、827名と考えられている。<sup>4)</sup>震洋隊の戦闘は、夜間碇泊している米輸送船隊を主攻撃目標としたが、船体側面攻撃は破壊力が拡散して弱いので、一艇隊8隻をもって攻撃したが、輸送船は周囲に丸太や角材を浮かべて、接近を妨害した。さらに2メートル以上の波浪には耐えられなかったため、その戦果は少なかった。<sup>5)</sup>

**水中特攻隊** 日本海軍の水中特攻兵器には、人間魚雷回天や特殊潜航艇甲標的と海竜が考えられる。しかし甲標的は搭乗員の生還が期待されて母艦が待機することになっていたため、ここで扱う狭義の「必死必殺」で、生還を期待し

ない「兵器」とは異なる。海竜は両舷に装備された2本の魚雷を発射後、帰還して反復攻撃することになっていたが、終戦間際には魚雷が不足したので、頭部に600キロ炸薬を搭載、特攻兵器となった。さて、海竜は有翼の特殊潜航艇として、世界潜水艦史上特異な存在であり、操縦装置には双発新鋭爆撃機銀河のハンドルを利用したので、水中飛行機などとも呼称された。海竜の誕生と実戦兵器化は、海軍工作学校教官浅野卯一郎中佐にある。彼は、1943年1月、第七潜水隊司令玉木留次郎大佐との対談で「空気と水は同じ流体なのだから、その中を運動するものは飛行機にしろ潜水艦にしろ、似ているべきであるのに実際は、はなはだ違っている。今の潜水艦は潜る時にはタンクに注水して水より重くなって沈み、浮かぶときは排水して、軽くなって浮かんでくる。これは飛行機ではなく飛行船の原理であり、船を重くするから水中も走るが、本質的には水上艦である」と語り、軍令部の了解を得て製図の作成に取り組んだ。その後紆余曲折を経て1943年7月、第一回模型試験に成功、仮称S金物と呼称されたが、結局実験兵器の段階で不採用になった。その後さらに研究を重ねて、横浜工業専門学校教授佐藤五郎氏等によって、仮称SS金物として製図完成、1944年7月試作一号、二号を経て三号艇成功、1945年3月正式に海竜と命名され、ただちに量産態勢に入り、東京帝国大学油壺臨海実験所（三浦半島）で、訓練養成された搭乗員によって、第十一突撃隊が編成されたのが嚆矢である。同6月から四国、九州、関東、東北の太平洋岸に、20部隊編成、20基地進出。

終戦時における製造海竜艇は224隻である。1945年6月8日の御前会議における大本営陸軍部の戦果判断基礎資料によると攻撃成功率は30%であった。戦闘参加はなく、<sup>6)</sup>

幻の特攻潜水艇である。終戦時、沖海中に自爆処理された。

## 2 茨城、福島の震洋隊

連合軍本土上陸に対する関東防衛北部基地隊として、茨城、福島に海軍水上特別攻撃隊、第138震洋隊と第141震洋隊が、終戦間際に緊急配備された。両隊の全搭乗員は、海軍甲種飛行予科練習生（以下予科練）出身である。従って本来なら、戦闘機のパイロットになるところが、特攻ボートに乗ることになってしまったので、慨嘆する者も多かったようである。彼らは予科練を1945年3月卒業すると、行き先も知らされず、軍用列車に乗せられて川棚魚雷艇訓練所（佐世保市）へ、そこで約2ヶ月間の特攻ボートの操作走航の厳しい訓練を受けて終了すると、第一特攻戦隊第七突撃隊に入隊、また行き先を知らされず、軍用列車で小名浜基地（福島県いわき市）に進出した。おくれて進出した第141震洋隊は、先遣隊第138震洋隊の基地や宿舎を共同使用する一方で、同隊の整備隊や基地隊は平潟町立国民学校高等科生を使用して、平潟（茨城県北茨城市）と隣接地九面（福島県いわき市）に、部隊基地の建設を急いでいたが、全部隊の移動が完了せずに終戦となった。

### ① 第138震洋隊渡辺部隊

**部隊編成** 第138震洋隊の編成は1945年5月25日、川棚魚雷艇訓練所で行われた。部隊長渡辺剛州中尉麾下、第1艇隊長目黒泰蔵少尉、第2艇隊長小野真海少尉、第3艇隊長木下稔少尉以下搭乗員48名、整備隊長清原未夫機関兵曹長以下整備隊員31名、基地隊長永島三郎兵曹長以下

基地隊員68名、本部付綾戸定吉機関兵曹長以下17名で、総員171名。渡辺部隊長（予備学生出身）は、第一航空戦隊旗艦天城の名航海士であったと伝えられている。渡辺部隊は、1艇隊が震洋艇8隻で3艇隊同24隻に補助2隻の合計26隻編成である。7)

### 基地進出 1945年6月10日小名浜基地進出。

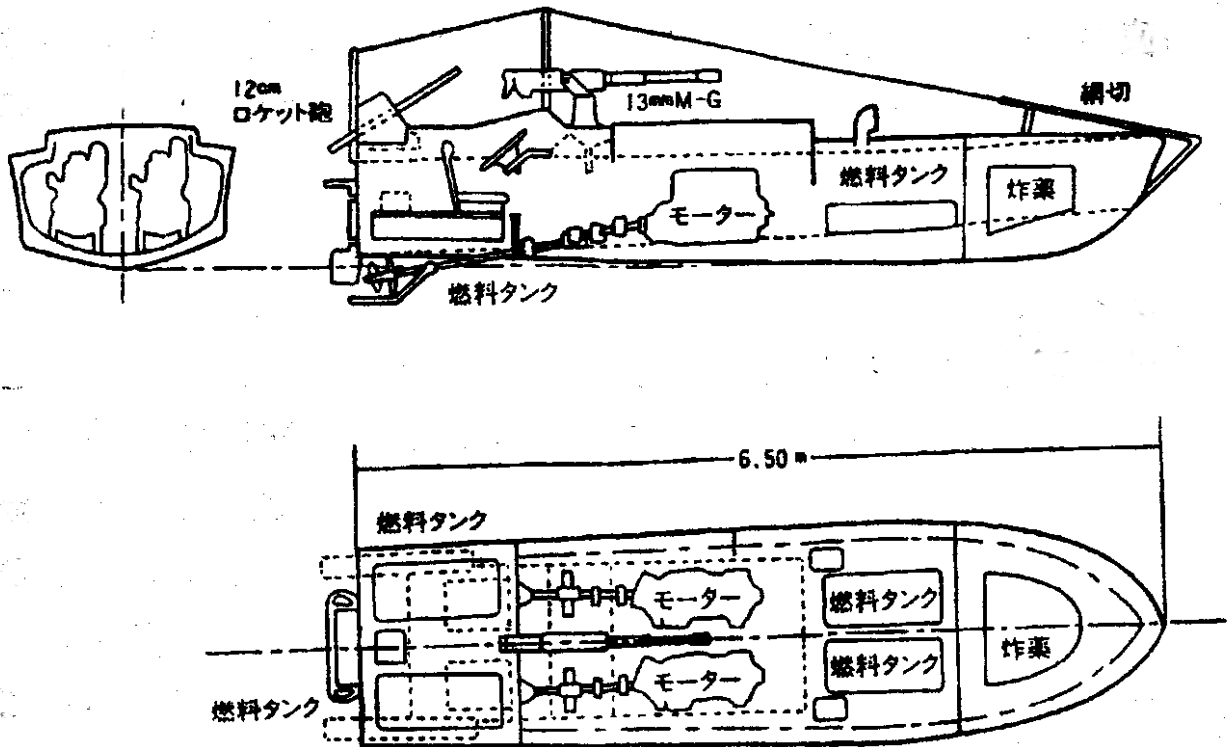
基地進出の上で、重要な特攻ボートの格納壕は、小名浜湾海岸沿い台地に、既に15の壕（燃料のガソリン、食糧の格納も含める）完成していた。当初は小名浜水産学校を宿舎としていた。現地調査用の内火艇や特攻ボートが間に合わず、地元漁船を徴発して、いわき市（四ツ倉、久之浜、小名浜）北茨城市（平潟、大津）、高萩市海岸、ひたちなか市那珂湊など、太平洋沿岸の調査を繰り返した。特に隣接平潟港は錬成基地として、重視された。

**震洋艇5型要目** 特攻ボートは、ベニヤ板製の改良5型（搭乗員2名）である。全長6.5メートル、全幅1.86メートル、深さ0.9メートル、喫水0.6メートル、排水量2.4トン、機関134馬力（トヨタ特KC型ガソリンエンジン67馬力2基）速力25ノット、航続力22ノット／275カイリ、兵装頭部炸薬250キロ、ロサ散弾（全長70センチ×直径12センチ2基）、13ミリ機関銃1基。（9頁参照）

**渡辺部隊略歴** 渡辺部隊の「出撃用意」は3度あった。1度目は1945年7月夜半のことである。塩屋崎（いわき市）監視所から、敵艦接近の速報があり、部隊はただちに出撃態勢を整え待機したが、結局「夜光虫の誤認」で解除となった。2度目は同7月17日夜11時30分頃、日立艦砲射撃（米海軍第38機動部隊戦艦アイオワ等5隻と英海軍高



## 五型震洋艇



速空母機動部隊キングジョージ5世1隻による本土攻撃)のときである。拡声器が鳴り響き、搭乗員たちは緊張の中で、この時のために用意していた褌と千人針の布を素早く身につけ、小走りで集合場所の格納庫前に整列した。口元を引締めた搭乗員のそれぞれの紅顔には覚悟が漲っていた。兵舎はガタガタ鳴り、頭上を真っ赤な砲弾の火の玉が轟音をたてて飛び、照明弾の投下で、一瞬真昼間のように明るくなったなかで、部隊長は白刃の軍刀を掲げて「我々震洋特別攻撃隊に攻撃命令下る。興国の興廃この一戦にあり」と叫ぶ。小走りの基地隊長「出撃よし」、続いて整備隊長も「整備よし」と叫ぶ。ただちに特攻ボートのエンジンを起動—しばらく待機、緊張の時間はアッと思う間に約2時間を過ぎて「出撃取り止

め、元の位置に付け」と、解除になってしまった。この間、部隊長は基地本部で、肅然たる幹部将校列席の中にいた。司令吉留善之助大佐が、「隊長行くかね」と声を掛けると、部隊長は「行っても無駄とは存知ますが」と答礼をした。終戦直後、第七特攻戦隊主計長力石小弥太大尉が「隊長あのときはよくぞ、行っても無駄と言いましたね。おかげで50名の生命が救われました」と述べ、真の勇氣と讃えたのであった。今でも、元搭乗員の方々は感謝している、と言う美談である。3度目の出撃は同8月14日～15日にかけて、常磐沖を通過する米艦隊に体当たりの下命があった時である。ところがその時、特攻ボートのガソリン不足で補給の要請中であつた。輸送が間に合わず、出撃が15日に延期となり、昼の終戦の詔勅で、3度目の出撃も取り止めとなつた。その頃、ガソリン不足は深刻で訓練にはアルコールを使用した、馬力が出なかつた。ある日、東京の高級将校が渡辺部隊の視察に来た。その時の講評は「第138震洋隊の志気、練度など総合して全海軍2位」と、称賛されることもあつた。同8月15日正午、重大放送があるので「総員集合せよ」の下命あり、地下壕通信室入口前に集合して「玉音放送」を聴くが、よく聴き取れず、兵舎に戻って部隊から終戦の詔勅であると聞かされ、軽挙妄動に走ることをないよう諭された。1945年8月31日、部隊長は総員を前にして「本日震洋特別突撃隊を解隊する。各員生家に帰り親孝行に励め。立つ鳥あとを濁さず」との、惜別の挨拶があり、復員となつた。

## ② 第141震洋隊三講部隊

**部隊編成** 三講部隊の編成は1945年6月25日、川棚魚雷艇訓練所で行われた。部隊長三講正美中尉麾下、第1艇隊長中野寛生少尉、第2艇隊長田口紀元少尉、第3艇隊長

内田良二少尉以下搭乗員50名、整備隊長黒須盤夫機関曹長以下整備隊員31名、基地隊長長峰光夫兵曹長以下基地隊員61名、本部付古谷泰造機関曹長以下18名で、総員167名。三溝部隊長(予備学生出身)は、物静かな学級肌の人で、搭乗員に対しては「明日に道をきかば夕べに死すとも可也」と、日常的に搭乗員に語りかけて、特攻隊員としての覚悟を諭していた。

**基地進出** 1945年7月10日いわき市小名浜基地進出と、震洋会編文献には記録されている。<sup>8)</sup> しかし小名浜に進出した搭乗員たちは当初、その宿舎を小名浜水産学校と小滝兵舎(いわき市小滝町)に分宿していた一方で、整備隊員や基地隊員は平潟に進出していた。整備隊員は平潟公会堂を宿舎にし、基地隊員は平潟国民学校校舎を宿舎にしていたのが実態であると考えられる。<sup>9)</sup> すなわち、元同隊整備隊員倉本辰郎氏(むつ市)は、同7月初旬、他の整備隊員と共に、直接平潟に進出して、特攻ボートなどの格納壕の掘削が主な仕事であった。整備すべき特攻ボートはなく、基地建設に従事していたのである。ここには、前記震洋会編文献と元同隊員、地元住民の証言の間に相違がある。さらに実態を解明する為の調査を続けた結果を以下要約する。(イ)終戦間際の同7月下旬頃、華蔵院(平潟港西側、現在の旅館静海亭地)には、第138震洋隊と第141震洋隊の連絡基地が置かれていて、多数の隊員が宿泊して、一日中無線などを打っていた。(ロ)平潟公会堂には30余名の整備隊員が宿泊し、3班に分かれて、格納壕などの掘削をしていた。同公会堂にはスコップ、ツルハシ、ダイナマイトなど多数の道具が置かれていた。平潟国民学校高等科2～3年生は交替で、週3回土砂岩石の搬送を手伝った。(ハ)平潟国民学校講堂には、多数の毛布と猟銃約10丁があり、約50名の隊

員の中に特攻服を着たグループもいて、高級缶詰のアスパラガスなどを食していた。また同校舎にも約30名の隊員が宿泊していた。(ニ) 三講部隊本部付松永栄主計曹長以下6名(写真現存)が、1945年8月初旬、部隊食事係として、小川博道宅地(平潟)の納屋に宿泊、くろがね三輪自動車で食材を運び調理していた。直径1メートルの鍋2個、長さ1メートルのお玉杓子2個、大型まな板(長さ2メートル×横1メートル、暑さ10センチ)と多数の食器類などが現存する。(ホ) 特攻ボート、食糧などの格納壕が平潟11ヶ所、(現認6ヶ所)、九面(いわき市勿来町)5ヶ所(現認4ヶ所)など16ヶ所の格納壕があった。(ヘ) 三講部隊元搭乗員田村隆司氏(柏市)は、終戦間際に、搭乗員内にも平潟基地への移動の話は出ていたと証言している。さて、これらの証言と物証を総合的に考察すると、1945年8月15日に、平潟基地建設は、ほぼ完成して、第141震洋隊の移動が既に始まっていたものと考えられる。

**部隊略歴** 前記田村隆司氏の同8月2日付「日誌」には、小さな港、平潟に訓練の為宿泊した事が「この地が我等の奮闘の地とあれば懐かしい感じがする。当地出身の鈴木兵曹の弟が遊びに来た」と記している。この「当地出身の鈴木兵曹」を調べたところ、彼は当時、平潟町に居住していた鈴木孝氏(予科練13期出身)で、三講部隊の搭乗員であった事が判明したが、現在は消息不明である。同7月17日の前記日立艦砲射撃のときは、下命により隊員たちは平潟公会堂に全員集合した。白八巻をした隊長が、手に軍刀を持って、整列した隊員の前で訓辞をした。しばらく待機したが解除となった。終戦時、特攻ボートは1型、5型合わせて10隻揃ったが、中古の物もあって、修理が大変だった。その上に特攻ボートは燃料のガソリン不足の為、アルコールを使用し

ていたので、馬力が出なかった。整備隊員たちは、そのアルコールを、時々失敬して酒の代わりに飲用した。また終戦直後には、2人の搭乗員が狂ったように特攻ボートに乗り、疾走させて、港内に戻ると沈没してしまった。ただちに特攻ボートは、平潟沖でも自爆させ海底に沈め処理した。同9月1日復員の時、隊員たちはお世話になったお礼にと、海軍紋章入りの陶製の食器やラッパなどを、前記根本氏や永井氏宅に置いていったのが、現存している。